

京都府の気候変動（気温）これから（中程度の温室効果ガスの排出が続く場合）

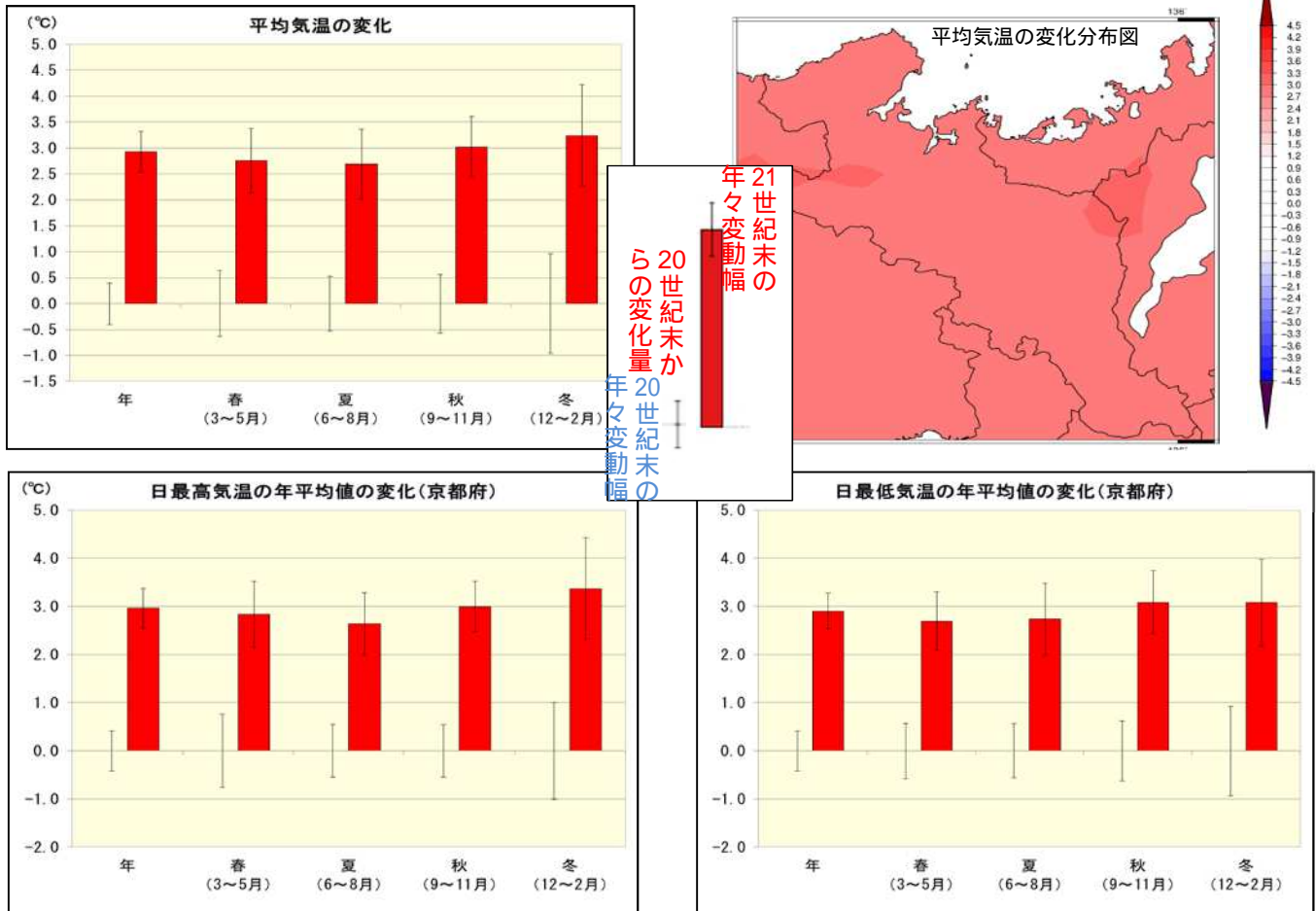
【気候の将来予測】

気象庁地球温暖化予測情報第8巻に基づき、1980～1999年を「現在気候」、2076～2095年を「将来気候」とし20世紀末から21世紀末の気候の変化を予測しました。

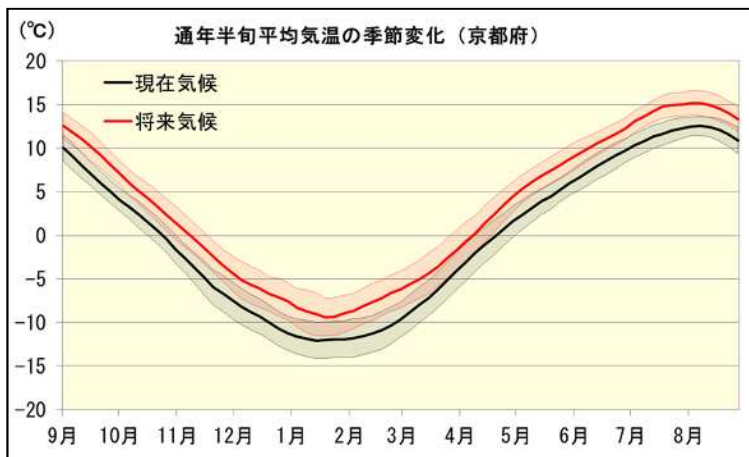
【京都府における年平均気温・日最高気温・日最低気温の将来予測】（将来気候と現在気候との差）

（棒グラフが現在気候との差、縦棒は年々変動の標準偏差（左：現在気候、右：将来気候）を示します。）

京都府における年平均気温、日最高気温、日最低気温について、20世紀末から21世紀末の変化を予測しました。年平均気温、日最高気温、日最低気温のすべてで、21世紀末には3 近くの上昇が予測され、日最高気温では冬に、日最低気温では秋に上昇が大きくなっています。現在京都の年平均気温は平年値が15.9 であり、21世紀末の気温予測の上昇分を加えると、現在の鹿児島県の年平均気温(18.6)より高くなります。



【日平均気温の季節進行の将来予測】（将来気候と現在気候との差）



冬から春にかけては、将来気候の年々変動の幅が現在気候の幅と重なっている時期が見られ、温暖化が進行しています。

将来においても、現在気候の平均気温と同程度の年もあることを示しています。

特に、夏の気温を比べると、将来気候と現在気候の変動の幅が重なっていない期間が長く、将来の夏における気温が毎年のように現在気候を大きく上回ることがうかがえます。

（縦軸は現在気候の年平均値からの偏差、折れ線は通年半年値、陰影は年々変動の標準偏差。）